

## 保育所における保育者との相互交渉場面における

### 1 - 2 歳児の「拒否・要求・調整」行為

名和 孝浩

#### I. 緒言

##### 1. 目的

ことばによるコミュニケーションが中心ではない乳児（0、1、2歳児）にとって、身体の動きは自分の内的な心理状態を表現するコミュニケーション手段である。昨今、子どものコミュニケーション能力の不足<sup>1)</sup>が言われるが、その育ちは乳児の頃から、ことば以外の行為によって既に始まっている<sup>2)</sup>。相手の解釈に支えられながら、自分の思いを伝えようとするのが、他者とのかかわりの芽生えと捉えられる。一方、保育者は、乳児のことば以外の行為から、内面を推し量り読み取ることが必要<sup>3)</sup>になる。しかし、ことばが伴わないため、何を訴え、何を求めているかを、保育者が上手く掴めない。特に乳児の拒否する場面は、対応に困る場面として挙げられる。そのため、乳児のことば以外の行為に着目して、他者とのかかわりを捉えることに意義があると言える。

本研究では、身体的な行為によって他者とのかかわりをもとうとする1-2歳児の実態を捉えるために、保育所の1-2歳児を対象とし、内的な心理状態が、どのような場面で、どのような身体の動きとして表現されるのかを検討する。特に本稿では、1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為の特徴を捉えるために、それらの行為を「身体表現」という観点から分析することを試みた。

##### 2. 本研究の理論的背景と用語の定義

###### (1) 1-2歳児を対象とする意義

本研究で調査対象とする1歳児クラスは、満1歳から2歳10か月までの月齢の子どもが在籍するため、本研究では、限定的に1-2歳児と表記する。1-2歳児は、それまでおとなに大きく指示されることで、ようやく成立していたコミュニケーションの関係から、次第に様々な手段を用いて、能動的にコミュニケーションに参与し始め、他者とのかかわりにおいて身体的な行為が多い時期である<sup>4)</sup>ことが認められた。しかし、保育者が1-2歳児の身体の動きから、上手く思いを解釈できずに、保育者との間に「ずれ」が生じている<sup>5)</sup>ことも指摘された。そのため、1-2歳児の身体的なかかわりに焦点を当てることに意義があると考えられた。

###### (2) 1-2歳児の動きを身体表現として捉える意義

身体の動きはそのまま精神の動きであり、実際に動きでどのようにコミュニケーションしているのかを探るためには、意識的・無意識的に表れたすべての身体の動きを捉える必要があると考えられた。そこで本研究では、身体の動きを、内的な心理状態の表れとしての「身体表現」として定義して捉える。身体の動きは、心理状態と身体運動の相関関係を規定するラバン身体動作表現理論<sup>6)</sup>、具体的には運動の成立要因「力性」「空間性」「時性」「身体の形態（部位、動き）」という観点を援用した。ラバン理論は、身体表現を数量的に分析する際に用いられており<sup>7) 8) 9)</sup>、乳幼児のコミュニケーションや、ヒューマンロボットの身体動作の分析にも利用されている<sup>10) 11)</sup>。なお、この観点の有効性については、

先行研究において検証され、その結果に基づいて活用のための分析シートが作成されている<sup>12)</sup>。

### (3) 「拒否・要求・調整」行為を焦点とする意義

1-2歳児は、親や保育者の提案や要求を拒否することで、おとなとは違う自分「われ」を主張するようになり<sup>13)</sup>、それは他者とのかかわりの場面として重要な意味をもっている。しかし、保育者の要求を拒否する場面において、拒否の言語的主張よりも、非言語的主張には保育者にとって受容にしにくい傾向が認められ<sup>14)</sup>、1-2歳児のかかわりが積極的になる場面であると共に、保育者が対応に困る場面でもある<sup>15)</sup>と考えられた。また、拒否と要求は表裏一体であり、「拒否」に着目することは同時に「要求」も捉える必要がある。これまで、1～2歳児の保育において保育者が対応に苦慮させられる「拒否」行動やその生起率に着目した研究は見られる<sup>16)</sup>が、拒否行動後の相互交渉の経過や結末までを、意味のあるひとまとまりとして捉えた研究は少ない。1-2歳児は、自律的な調整と、おとなの手を借りての調整が入り混じる時期である。そこで、本研究では、1-2歳児の身体表現を捉えるためには、子どもが拒否を始めてから結末に至るまでの、「拒否・要求・調整」という一連の相互交渉場面に着目することが有効であると考えられた。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象と期間

岐阜県B市内私立保育園1歳児クラス（1歳児19名、保育士4名）、2014年5月13日～10月28日の期間、9時から12時頃までの登園後の自由遊びから給食までの場面で、16回（1月当たり2、3回）の参与観察を行った。なお、観察期間中の対象児の月齢は、1歳5か月～2歳2か月であった。

### 2. 手続き

観察場面は、筆記記述とともにビデオ撮影を行った。観察終了後、映像を逐語記録した。

### 3. 分析の対象と手順

1-2歳児と保育者のかかわりの事例から、1-2歳児の「拒否・要求・調整」の動きを身体表現として捉えた。そのため、明らかに本人の「拒否・要求・調整」が身体に表れたもので、かつ、その内容が比較的に短時間のなかで解決したと捉えられたものを分析の対象とした。明らかに年齢にそぐわない状況や、その内容が観察者に可視的に捉えられない事例は分析の対象からは省いた。その結果、50事例が抽出できた。それらを先行研究で作成した分析シートを用いて、事例中に確認できた「拒否・要求・調整」行為の解釈を加え、身体表現から捉えることができた特徴ごとに分類し考察した。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 「拒否・要求・調整」が発現する場面とタイプの分類

1-2歳児が保育者に対して「拒否」を始めた場面から、観察者から見て「調整」に至ったと捉えられた場面までを一括りの事例とした。どのように「調整」に至ったかを見ることによって、「拒否」の理由や目的を探ることができると考えられた。保育者の要求に対して拒否をすることは、逆に言えば何らかの要求が子どもの側にあるということになる。調整に至った際に、その要求が通ったのか、もしくは通らなかったのかという見方は、「拒否」の理由や目的を探る上でも重要である。また子どもが要求を通すには、保育者が子どもに拒否された自分の要求を取り下げることが必要になる。本研究では、そうした調整に至る経緯の違いにおいて、1-2歳児の身体表現による違いが、保育者の応答にも影響を与えているのではないかと推測した。

そこで、まず保育者に対しての「拒否」がどのように「調整」に至ったのかという視点から分類し

た。その結果、3 場面に分類できた。さらに場面ごとに、1-2 歳児の「拒否・要求・調整」行為を身体表現として捉え、同一もしくは類似する行為ごとに分類した結果、7 タイプに分類できた（表1）。なお本研究において、「こうしたい」という思いが満たされる状況を「欲求」、保育者に求めることやその行為を「要求」として区別した。

表1 「拒否・要求・調整」の場面とタイプ

「拒否・要求・調整」が発現する場面	「拒否・要求・調整」のタイプ	事例タイトル
I) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ったことで調整に至る場面：16%（8例）	a：拒否の動きを表すことによって、より拒否が強まり、保育者が要求に応えた：10%（5例）	「このままにしないで！」
		「ぼくの番はまだ！？」
		「ねえ、ぼくに気づいて！」
		「早く給食が食べたいの！」
		「もう熱くないよ」
	b：保育者の要求的な意図に拘わらず、自分の欲求を満たそうとする動きを続けることで、結果的に自分の欲求を叶える：6%（3例）	「止めても入っちゃうから」
II) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調整に至る場面：60%（30例）	c：新しい欲求が生まれた瞬間に、身体の動きが切り替わり、調整に至る：16%（8例）	「とにかくプールに入りたいの！」
		「何度も登っちゃおっと」
		「あの子は何をするのかな？」
		「自分で拭きたかったけど」
		「お友達を連れて行こう」
		「まだ手を洗っていたかったけど」
		「あ。ぼくのパスタオルだ」
		「おもちゃ発見」
		「どれにしようかな」
	d：保育者との身体的密着により、徐々に調整に至る：26%（13例）	「先生と一緒に私やってみる」
		「ヤダ。もっと抱っこして」
		「抱っここのままがいい」
		「抱っこしてくれなきゃやらないから」
		「それなら抱っこして」
		「わたしの傍にいて」
		「次のことなんかしたくない」
		「ぼくから離れないで！」
		「抱っこじゃないと食べないからね」
		「最後はおんぶで」
	e：保育者との身体的密着そのものが目的に変わり、調整に至る：18%（9例）	「抱っこしててくれないと泣いちゃうよ」
		「先生にくっついてるから」
		「ずっとずっと傍にいて」
		「抱っこしててくれないと治まらない」
		「抱っこされたら安心しちゃった」
		「抱っこしてくれたから、もういいよ」
		「抱っこしてもらえなし着替えようっと」
		「給食よりも抱っこがいいな」
III) 拒否自体が目的の場面：24%（12例）	f：保育者の要求に対して拒否をすることそのものが目的：14%（7例）	「抱っこしてくれるなら、イタズラはいいや」
		「手洗いはもういいや」
		「もう次のことしようっと」
		「もう大丈夫。朝の会やる」
		「抱っこしてもらえなし、手洗いに行こう」
		「こっちまでおいで」
	g：他児の拒否に同調して、追従することが目的：10%（5例）	「ぼくはここだよ」
		「呼んでくれるの待ってたの！」
		「見つかったちゃった」
		「先生、ぼくのところに来て！」
		「一緒にしてくれないと逃げちゃうよ」
		「わたしが逃げたら追いかけて」
		「ぼくも入れて」
		「お隣いい？」
		「わたしも乗る」
		「あの子のあとを追いかけてみよう」
		「わたしは途中でやめるけど」

## 2. 身体表現として捉えた「拒否・要求・調整」行為の特徴

抽出された50事例から、代表的な事例を基に「拒否・要求・調整」行為の各タイプの特徴について述べる。各考察は以下の流れで進めた。

分析1：各事例の「分析シート」、分析2：それをもとにした各事例における「対象児の内面の省察」、考察：（複数の）事例から見られる「拒否・要求・調整」行為の特徴である。

本稿では、「I）保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ったことで調整に至る場面、a：拒否の動きを表すことによって、より拒否が強まり、保育者が要求に応えた」では、分析1、分析2、考察の流れを示した。以降、6つのタイプについては、分析部分の資料は省略し考察部分のみの概要を記述した。

### （1）場面I）保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ったことで調整に至る場面

タイプa：拒否の動きを表すことによって、より拒否が強まり、保育者が要求に応えた

#### 分析1：事例の「分析シート」：事例「ぼくの番はまだ？」

「ぼくの番はまだ!？」														
事例	年月日	対象児	性別	月 齢	I) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ることで調整に至る場面									
a-1	2014. 05. 20	カズキ	男児	1.9	a：拒否を動きで表すことによって、より拒否が強まり、保育者が子どもの要求に応えた									
要 旨	乳母車で園外散歩から戻ってくると、降ろしてもらった子どもから順番に、保育者と手を洗いに行く。A先生がカズキの乗っている乳母車に来て、「手洗うで、お袖めくろうね～」と言いながら、カズキをはじめ、数人の服の袖をめくる。カズキは自分の袖をめくってもらおうと、A先生を見るが、A先生は他の子どもの袖をめくっている。①「うあぁ～～」と大きな声をあげ、乳母車の手すりに掴まり体を揺する。A先生が他児を乳母車から降ろそうと抱き抱えようとする、②さらに体を揺すり、声を大きくする。A先生はカズキを見て、他児に「ごめん、ちょっと待っててね」と言葉をかけると、③先にカズキを乳母車から抱き上げて降ろす。カズキは乳母車を降りると静かになり、水道へ向かって自分で手を洗う。													
時 間	直前に起きた事象	身体 の 形 態		力 性		空 間 性					時 性			拒否・要求・調整の区分
		動  き	部  位	強  度	移動の有無	移動の経路	保育者との向き	姿勢の重心(前後)	姿勢の重心(左右)	姿勢の高さ	くり返しの有無	動きの速さ	動きの頻度	
01:33—01:40	A先生が他児の服の袖をめくる	①乳母車に掴まり体を揺らす	上肢 体幹	4	無	無	対面	3	C	3→4	無	4	小刻みに連続的	拒否と要求
01:41—01:45	A先生が他児の乳母車から降ろそうとする	②乳母車に掴まり体を揺らす	上肢 体幹	4→5	無	無	対面	3	C	2→4	無	5	小刻みに連続的	拒否と要求
01:48	他児を待たせてカズキを優先する	③乳母車から降ろしてもらう	上肢	1	無	無	対面	3	C	4	無	1	単発的	調整
分析シートからの解釈	A先生に服の袖をめくってもらふことは、「手を洗う」と共に、「乳母車から降ろしてもらう」ことを示している。カズキは袖をめくってもらった時ではなく、A先生が、自分の袖をめくったにもかかわらず、他児のところへいった瞬間に①乳母車に捕まり体を揺らしている。この動きの詳細は、身体部位「上肢」「体幹」を使った大きな動きで、力性の強度：4、時性の動きの速さ：4という強く速い動きと捉えられた。また姿勢の高さ：3→4と小刻みに上下に揺れる動きと捉えられた。自分が降ろしてもらふ番だと思っていたのに、A先生が他児の援助に行ってしまったことに対して、身体の激しい動きで、「他児のところへ行かず早く降ろしてほしい」という「拒否と要求」の思いが表われたと読み取れた。											⇒激しい動きで拒否を表す		
	次に、A先生が他児を降ろそうすると、再び②乳母車に捕まり体を揺らす。行為自体は同じだが、力性：4→5、動きの速さ：5、また姿勢の高さ：2→4と、①の動きよりもさらに激しい動きと捉えられた。この動きの直前に起きた事象から、A先生が他児を降ろそうとしたことにより、先程の自分の要求を認めてもらえないことで、より身体動きが強まったと読み取れた。①と同じ行為であるが「他児じゃなくて自分を降ろして」という別の「拒否と要求」の思いが読み取れた。											⇒自分の要求が通らず身体 の動きが強まる		
カズキを見たA先生は、他児を降ろすのを途中で止めて、先に③カズキを乳母車から降ろしている。この動きは、A先生に抱えられているため、部位を上肢とし、力性の強度：1、時性の動きの速さ：1とした。A先生が、カズキの動きから思いの強さを感じ、要求に応じて順番を変えて先に降ろすことで、カズキは手洗いという次の生活の日課へと、スムーズに進めており、この動きによって「調整」に至ったと捉えられた。														

\* 分析シート内の事例中の一重下線部は、抽出した動きの「直前に起きた事象」を指し、○で囲んだ数字とそれ以下の二重下線部は、抽出した動きである。事例欄の下に、分析シートによる身体の動きの要素を書き出し、それを基にした考察の内容を、さらに下の欄に加えた。また、考察の右側には、その動きの特徴を示した。

### 分析2：対象児の内面の省察

「ぼくの番はまだ?」は、園外散歩から戻ってきたカズキが、乳母車を降りる順番を待たせている



保育者に対して「拒否」をする事例である。まず、手洗いの準備としてカズキの袖を保育者が、カズキを降ろさずに、引き続き他児の袖をめぐったことに対して、カズキは乳母車に捕まり、自分の体を揺らした。これを、「他児のところへ行かずに早く降ろしとほしい」と訴えるカズキの「拒否と要求」の入り混じった動きだと解釈できた。次に、保育者が他児を乳母車から降ろそうとする。これに対し、カズキは再び体を揺するのだが、分析シートによる動きの分析から、身体の動きが強まる様子が捉えられた。保育者が他児を降ろそうとしたことで、先程の「早く降ろして」という要求が認められなかったと感じ、「まず自分を降ろして」という要求に切り替わっていると読み取れた。「体を揺らす」という同じ行為でも、保育者が自分の要求とは異なる動きをし、要求が認められていないと感じたことで、身体の動きをより強く表した、すると、保育者は他児を降ろすことを途中で止めて、先にカズキを抱きかかえて乳母車から降ろした。他児に「ちょっと待ってて」と告げながら、降ろす順番を変えた保育者は、明らかにカズキの動きに緊急性を感じ順番を変えたと読み取れた。先に降ろしてもらえたカズキは、次の生活の日課である手洗いも自分で行っており、保育者が自分の要求に応じてくれたことで、「拒否」の思いは解消され「調整」に至ったと捉えられた。

#### 考察：事例から見られる「拒否・要求・調整」行為の特徴

カズキは、保育者に袖をまくってもらったが、順番通りに乳母車を降ろしてもらえず身体を上下に揺らし始める。これに対し、保育者が他児を先に降ろそうとしたところで、上下に揺らしていた身体の動きが強まった。この時期の子どもは、目前に自分の楽しみが見えるのに、待つ時間が長引くと我慢ができずに手をバタバタさせたり泣き出したり<sup>17)</sup>といった行為をする。他の事例ともに、欲求が叶えられない時間経過に合わせて、身体の動きが強くなる様子が見られた。しかし、例えば保育者に「手を差し出す」といった明確な意図が感じられる動きはしておらず、1-2歳の子どもは、怒った時に全身の大きくて激しい動作で相手との関係を求めるよりも、むしろ一人で動いて感情を表現する<sup>18)</sup>ようであった。こうした動きは、「こうしてほしい」と言うよりも、とにかく「イヤだ」という子どもの拒否の思いの表現であると言える。ジェームス<sup>19)</sup>は、身体的変化は刺激を与える事実の知覚の直後に起こり、この変化の起こっている時のこれに対する感じがすなわち情動であると述べ、身体の動きによって感情や情動が起こるという関係や、情動は身体的な変化や感覚抜きには存在し得ないとしている。人間の心は、体の動きがあって成り立ち、心は身体の動きから生まれた感覚である<sup>20)</sup>なら、自分の要求が通らないことや、待ち時間によって、身体の動きが強まり、より強い拒否の思いも引き出される。

また事例に共通して、子どもの動きがより激しくなったことで、保育者が順番を変えたり、慌てて応答したりする様子が見られた。相手との関係を求めている動きでも、身体をのけぞらせて怒ったりすることは、「人」に向けられた行為であり<sup>21)</sup>、それを受けた保育者は、思わず応答してしまうのではないだろうか。乳児は、どんなに激しく泣いていても、動きを随意的にコントロールしようとしている<sup>22)</sup>とも言われ、「拒否・要求・調整」の場面では、身体の動きを強めることで、より拒否の思いを強くし、保育者に自分の要求に応じてもらおうと働きかけていると捉えられた。

以上、保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ったことで調整に至る場面「拒否の動きを表すことによって、より拒否が強まり、保育者が要求に応えた」では、身体の動きを強めることで、より拒否が強まると考えられた。子どもの身体の動きの強まりに、保育者が子どもを乳母車から降ろす順番を変えたり、保育者が慌てて子どものもとに戻ってきたりする様子もあり、身体の動きを強くすることで、保育者に自分の要求に応じてもらい調整に至る「拒否・要求・調整」の行為である。

(2) 場面Ⅰ) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通ったことで調整に至る場面

タイプb：保育者の要求的な意図に拘わらず、自分の欲求を満たそうとする動きを続けることで、結果的に自分の欲求を叶える

場面Ⅰ) タイプbとして分類された事例は3事例あった。「とにかくプールに入りたいの!」のミュはプールに入ろうとして、水着を忘れたために保育者に止められるが、その意図を無視してとにかくプールに入ろうとする場面であった。ミュは、保育者にプールに入ることを止められても、それを拒否して、とにかくプールに入ろうとする動きを繰り返す。しかし、自分がプールに入ることを止めている保育者に対して、怒ったり反抗的な表現を示したりせず、逆にその保育者に対して、手を伸ばし、自分を抱いてプールに入れるように要求しており、保育者の要求を無視していると捉えられる。

分析シート、対象児の内面の省察の分析から、場面Ⅰ) タイプbは、保育者の要求に対して、子どもは保育者の意図とは無関係に、強い身体の動きで拒否を続ける。その結果、保育者は当初の要求を通すことを諦め、子どもの拒否と要求がほぼ通ったかたちで調整に至る「拒否・要求・調整」の行為であることが特徴として示された。

(3) 場面Ⅱ) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調整に至る場面

タイプc：新しい欲求が生まれた瞬間に、身体の動きが切り替わり、調整に至る

場面Ⅱ) タイプcとして分類された事例は9事例あった。

「まだ手を洗っていたかったけど」では、ハナは保育者に抱くようにして水道から離されると、体を曲げて、重心を保育者の進行方向に傾け全身で抵抗する。次の生活の日課が絵本の読み聞かせであったため、保育者によって絵本の読み聞かせが行われるソファに座らされるが、力なく全身をソファにもたれさせる。このような姿勢は、ネガティブな気分に関係している<sup>23)</sup>とされ、自分が置かれている状況に納得していない様子が読み取れる。しかし、保育者が絵本の読み聞かせのため手遊びを始めると、途端に姿勢を立て直し、身体を保育者に向けてから自分も手遊びを始め、次の生活の日課に移行した。事例に共通して、「～したい」という欲求から、次の日課へと移ってほしいという保育者の要求を拒否していたが、新しい欲求が生まれた瞬間に、身体の動きが切り替わり、調整に至る様子が見られた。子どもは、常に「楽しさ」や「おもしろさ」を探索している存在であり<sup>24)</sup>、それまでの欲求が上手く満たされていない場合でも、新たに自分が興味をもてる何かを探している。それが見つかることをきっかけに、動きと共に、それまで保育者に拒否をしていた自分の気持ちをも切り替えていると考えられる。新しい欲求を生み出すことで、自ら心地よい状態を創り出そうとし<sup>25)</sup>、自発的に調整に至る1-2歳児の「拒否・要求・調整」の特徴が捉えられた。また、新しい欲求が生まれる状況の違いとして、保育者の行為をはじめ、他児を含む他者の行為によって喚起される場合と、自分の所有物やおもちゃといったモノによって喚起される場合が見られた。情動調整場面において、1歳半頃には他のおもちゃへ注意を向けるという「注意転換」をすることが指摘されてお<sup>26)</sup>、欲求が満たされず不満である自分の思いを調整しようとする特徴が見られた。

以上、分析シート、対象児の内面の省察の分析から、場面Ⅱ) タイプcは、自分の要求が通らない場合でも、新しい欲求が喚起されることで、身体の動きが切り替わり、自発的に次の活動へ向かうことで調整に至る「拒否・要求・調整」の行為であることが特徴として示された。また、新しい欲求が生まれる要因には、他者（保育者、他児）の行為やモノという状況の違いが見られた。

(4) 場面Ⅱ) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調整に至る場面

タイプd：保育者との身体的密着により、徐々に調整に至る

場面Ⅱ) タイプdとして分類された事例は13事例あった。

「わたしの傍にいて」では、サキがオムツ交換場で、担当保育者以外がオムツを換えようとしたところ泣いて抵抗し、担当保育者に代わるも調整に至ると捉えられるまで、保育者の膝に寝転んだり、傍に近寄ったりを繰り返す。このような場面で、1-2歳児の拒否・要求が調整に至るまでには、保育者との身体的密着が重要であることが考えられた。2者間の身体的に密接な距離の近い関係は、心理的にも密接な関係を日常的にもち、互いに慣れ親しみ合った関係をもつことである<sup>27)</sup>とされ、「保育者の身体的密着により、徐々に調整に至る」は、保育者の要求を拒否するが、同時に、身体的な密着によってその保育者との親密なかかわりをもちながら、調整に至ると捉えられる。サキが拒否したオムツ交換が終了しても、保育者が次の活動準備のためなどで、頻繁に立ち歩かなければならなかった時に、サキは保育者の後を何度も追う。本来の拒否が解消された場合でも、内面の調整までには至らず、保育者との心の結びつきによって、1-2歳児なりに調整に向かおうとする様子が見られた。

抱きなどの身体接触の特徴として、送り手は自動的に受け手になるという対称性があり、双方向コミュニケーションの一つの手段になると考えられており<sup>28)</sup>、サキのように、最初に保育者が抱き始めた場合でも、子ども側の「もっと抱いていて」という意図が読み取れる。また、自分から離れる様子も捉えられたが、抱きを双方向のコミュニケーションとして捉えた場合、西條<sup>29)</sup> 30) は、母子間の「抱き」という行為について、母親が一方的に行うものではなく、子ども側から「姿勢変化」や「おとなから離れる」ことを促すといった能動的なかかわりであることを明らかにしている。

「保育者との身体的密着により、徐々に調整に至る」に分類できたいずれの事例も、保育者の要求を拒否してから調整に至るまでに、他の場面よりも時間がかかっていた。1-2歳児の強い自己主張や反抗は、おとながその子どもを扱いにくいと感じる理由<sup>31)</sup>になっている。「保育者との身体的密着により、徐々に調整に至る」には、子どもの扱いにくさがあると同時に、身体的なかかわりから捉えることで、保育者との絆を深めていく重要な場面であるとも考えられた。

以上、分析シート、対象児の内面の省察の分析から、保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調子に至る場面「保育者の身体的密着により、徐々に調整に至る」では、「拒否・要求・調整」において、自分の欲求が満たされなかった場合、保育者に抱かれたり、くっついたりといった身体的密着によって徐々に調整に至る様子が捉えられた。自分の動きによって保育者との身体的密着を半ば強要するかたちで継続したり、自分から身体的密着を求めつつ離れたりすることで、子ども自身が能動的に調整に向かおうとする「拒否・要求・調整」である。身体的密着を半ば強要するかたちで継続されるため、保育者にとって扱いにくいと感じる場面でもあるが、身体的なかかわりを通して、より絆が深まる場面でもある。

#### (5) 場面Ⅱ) 保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調整に至る場面

タイプe：保育者との身体的密着そのものが目的に変わり、調整に至る

場面Ⅱ) タイプeとして分類された事例は9事例あった。

「抱っこしてくれたから、もういいよ」では、ケンタが戸外から室内へ入ることを拒否し、その場に座り込んで泣く。その際、保育者に抱かれることですぐに泣き止み、落ち着く様子が見られた。「給食よりも抱っこがいいな」では、リナが給食を終えることを拒否し、ケンタと同じように座り込んで泣く。保育者が抱くと、すぐに泣き止み、食事テーブルを指差して、給食を食べたそうにするも、結果として食事には戻らず保育者に抱かれることを選び、次の活動へと向かった。2事例とも、保育者が泣いて拒否をしている子どもを泣き止ませようと抱いたことが調整に至る行為となっている。子どもの一人泣きの場面で、保育者の対応として抱くなどの身体接触や身体的接近が一番多いことが報告されており<sup>32)</sup>、保育者には子どもの気持ちを落ちつけようとする意図がある。また保育者が抱くとなす



ぐに泣くのを止めて落ち着くことは、安全基地としての保育者との愛着関係の安定性<sup>33)</sup>を示している。

保育者が抱いてからの子どもの動きに着目してみると、2事例とも、保育者の子どもを落ち着かせようとする意図をもった抱きによって、それまでの目的から、保育者との身体的密着そのものによって変わってしまうことで、同時に調整に至っていると捉えられた。それは、子ども側が意図的に調整に至ったというよりも、保育者の身体的なかかわりによって、受動的に調整に至る行為であると考えられた。

以上、保育者の要求に対して拒否をし、自分の要求が通らないが調整に至る場面「保育者との身体的密着そのものが目的に変わり、調整に至る」では、保育者に抱かれることによって、保育者との身体的密着が目的に変わり、その動き自体が調整になっていると考えられた。また自分から保育者との身体的密着を求めていく動きは捉えられず、保育者からの身体的なかかわりによって、保育者との親密な関係に支えられながら、受動的に調整に至る「拒否・要求・調整」行為である

#### (6) 場面Ⅲ) 拒否自体が目的の場合

タイプf：保育者の要求に対して拒否をすることそのものが目的

場面Ⅲ) タイプfとして分類された事例は7事例あった。

「先生、ぼくのところに来て！」では、タツヤは、タオルで口を拭こうとした保育者が追いかけてくると見ると、笑いながら、わざわざジャンプをするように寝そべってタオルで拭けないようにし、ふざけながら抵抗している。大げさであったりリズムカルな動きであったりすることによって、身体的な遊戯性が表現されていると捉えられた。また複数の事例に共通して「走った後で振り返り保育者を見る」といった保育者の次の行動を期待するような動きが確認された。村上<sup>34)</sup>は、1-2歳児のオムツ交換場面において、「ふざけながら抵抗する」は親がかまってくれることを期待するような抵抗であり、家庭のみで確認できた特有の行為で、親への抵抗を楽しみ、親の関心を引きとめて交渉を楽しむ、親子のやりとりの豊かさを示すものとした。本研究では、オムツ交換以外の場面にも着目した結果、保育者に対してもふざけながら拒否をし、構ってくれることを期待する様子が捉えられた。

また、タツヤの逃げる動きは、大げさで、リズムカルな動きと捉えられ、「嫌がっている」という思いは読み取れず、むしろやりとりを楽しんでいると読み取れた。保育者が来ると逃げ、保育者が離れると自ら近寄り、再び保育者が来るとそれに合わせて逃げたりしている。保育者の方を向き直す動きは、視線や身体を向けることで、かかわりたい相手に誘いかけると共に、これから起こるであろう応答への期待が込められていると捉えられた。自分から「行く」ことを手段として、相手に「来させる」動きは、見せびらかしや演技に近く、ふざけていることが、相手との間に了承された「ゲーム」の機能を備えている<sup>35)</sup>ことで成立しており、保育者の要求を拒否しつつも、子どもと保育者で「本当は嫌がっていないよ」という意識を共有していると言える。

以上、拒否自体が目的の場面「保育者の要求に対して拒否をすることそのものが目的」では、「拒否」という保育者が無視できない状況によって、1-2歳児は保育者の動きを誘い出し、かかわろうとする様子が捉えられた。また身体の動き自体に、保育者との「拒否・要求・調整」を楽しむ様子が表れている。意図的に保育者を自分の方に誘い出すことで、保育者との一对一の状況を作り、満たされようとする「拒否、要求、調整」行為である。

#### (7) 場面Ⅲ) 拒否自体が目的の場合

タイプg：他児の拒否に同調して、追従することが目的

場面Ⅲ) タイプgとして分類された事例は5事例あった。

「あの子のあとを追いかけてみよう」では、タケシが保育者の要求に対して、移動せずにマットに乗っているコウジを見て近寄ることで、タケシの拒否が始まる。そして、コウジが寝転がると、わざわざ



隣まで行き同じように寝転ぶ。他の事例とも共通して、他児の拒否が要因になって、拒否が起きると捉えられた。江口<sup>36)</sup>は、1歳代の子どもの間の行動特徴について、相手や相手の動作を見たり、相手の方に移動して距離を縮めたりする行動を関心行動としている。タケシは、ただマットに乗るのではなく、身体が伸び上がるほど力強く飛び乗っており、またわざわざコウジの隣に行くといった動きには、「コウジのしていることに興味があつてたまらない」という様子が見られる。これらの動きからは、保育者の要求を拒否している他児の動きへの関心の高さが表れている。

また分析シートを用いたことにより、タケシの動きとコウジの動きの要素が同じであることが確認され、関心を示した他児の動きに同調して拒否をしていると捉えられた。他者と同じ動きをすることは親しさを表しており<sup>37)</sup>、子どもの仲間意識という心理的な共同性は、他者と同じ動きをするという身体的な共同性に他ならない。しかし、子どもが「保育者に拒否をしよう」と共通の思いをもっているのだろうか。「タケシくん！お話聞いて？」と言いながら、タケシを連れて行こうと手を伸ばす保育者に対し、寝転んでいるコウジを気にせず、保育者の要求を聞き入れるように自分から手を伸ばしている。0～2歳児の模倣という観点からの研究では大桑<sup>37)</sup>が、この時期のコミュニケーションとしての模倣は、模倣すること自体を楽しんでいるとしている。「他児の拒否に同調して追従することが目的」において、同調して追従しているのは、あくまで他児の動きであり、元々他児がもっていた拒否の思いにまで同調はしていないと考えられた。そのため、最初に拒否を始めた他児よりも、同調し追従した子どもの方が、保育者の要求を聞き入れやすく、調整に至る行為に違いが見られた。「他児の拒否に同調して、追従することが目的」は、保育所といった複数の1-2歳児が生活を共にしているからこそ、他児が要因となって拒否が起こる保育場面特有の「拒否・要求・調整」行為であると考えられた。

以上、拒否自体が目的の場面「他児の拒否に同調して、追従することが目的」では、自分以外の他児が始めた「拒否」に誘われ、他児の拒否に身体的に同調することで、自分も保育者の要求を拒否し、追従することを楽しむ様子が見られた。他児の動きに同調しながらも保育者の様子を見るなど、保育者の要求や、その場の状況を意識しつつ、他児の動きに魅力を感じ、同じ動きをして追いかけたり、近寄ってから隣で同じ動きをしたりすることで、身体的な行為で他児とつながろうとする、保育場面特有の「拒否・要求・調整」の行為である。

#### IV. 結語

本研究では、身体的な行為によって他者とのかわりをもとうとする1-2歳児の実態を捉えるために、1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を、内面の表れとしての身体表現として捉えた結果、3つの場面に分類できた。また場面ごとに、身体表現から捉えた1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を、同一もしくは類似する行為ごとに分類した結果、7つのタイプに分類できた。本稿では、それぞれの特徴を考察した。そこからは、1-2歳児における「身体を持つ力」が示唆された。今後は、「拒否・要求・調整」行為の発達的变化に着目することで、「身体を持つ力」に関する論考を深めていきたい。そのうえで、乳児保育における保育者の援助の視点や方策を探ることを課題とする。

#### 引用文献

- 1 文部科学省中央教育審議会答申（2005）子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について
- 2 内田信子編（2006）発達心理学キーワード、有斐閣、25-32
- 3 名須川知子・高橋敏之編著（2006）保育内容「表現論」、ミネルヴァ書房、111

保育所における保育者との相互交渉場面における1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為

- 4 川田学・塚田みちる・川田暁子（2005）乳児期における自己主張の発達と母親の対処行動の変容：食事場面における生後5カ月から15カ月までの縦断研究. 発達心理学研究, 16, 46-58
- 5 石井博子・西山梢・白井潤子・堀江直子・氏原雅子・寺見陽子（2000）乳児と保育者のかかわりに関する考察（2）：保育者のかかわりの「ずれ」が意味するもの. 日本保育学会大会研究論文集, 53, 814-815
- 6 中田亨（2008）ラバン身体表現理論. 知能と情報：日本知能情報フェジイ学会誌, 20（1）, 132
- 7 朴淳香（1998）舞蹈創作における創作意図の数量的分析. 情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピューター研究報告, 98（97）, 1-8
- 8 岩城朱美（1999）ルドルフ・ラバンにおける身体運動の記譜法に関する考察. 日本建築学会建築歴史・意匠, 561-562
- 9 高橋克己・八村広三郎・吉村ミツ（2005）LMAに基づく舞踊動作の解析・評価. 情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピューター研究報告, 10, 9-16
- 10 中田亨・森武俊・佐藤知正（2001）ロボットの身体動作表現と生成される印象とのラバン特徴量を介した定量的相関分析. 日本ロボット学会誌, 19（2）, 104-111
- 11 増田恵・加藤昇平・伊藤英則（2011）ラバン理論に基づいたヒューマンロボット身体動作の動作特徴抽出と表出感情推定. 日本感性工学会論文誌, 10（2）, 295-303
- 12 名和孝浩・田村佳世・鈴木裕子（2015）保育所における1-2歳児の「拒否・要求・調整」行為を身体表現として描き出す試み. 愛知教育大学研究報告教育科学編, 64, 11-19
- 13 今井和子（2009）自我の芽生え—はじめて体験する「人とのぶつかり」, 1歳児の育ち事典, 小学館, 6-9
- 14 石川真由美（2012）幼児の自己主張に対する保育者の意識と援助—「いや」と言う場面を中心に—, 愛知教育大学幼児教育研究, 16, 17-24
- 15 古賀松香（2011）1歳児保育の難しさとは何か. 保育学研究, 49（3）, 8-19
- 16 則松宏子（1999）食事場面における拒否行動と母子相互交渉—0歳から3歳の場合—. 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 458
- 17 吉村真理子・森上史朗・岸井慶子・赤坂榮・高嶋景子・渡辺英則・小嶋雅典・大豆生田啓友（2014）0～2歳児の保育—育ちの意味を考える—, ミネルヴァ書房, 204-206
- 18 高野牧子（2010）幼児期の感情表現および意識的な身体表現による母子間のコミュニケーション. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 5, 17-26
- 19 ウィリアム・ジェームス 今田寛訳（1993）心理学 下, 岩波文庫, 204-211
- 20 春木豊（2011）動きが心をつくる 身体心理学への招待, 講談社, 117-122
- 21 麻生武（1992）身ぶりからことばへ 赤ちゃんにみる私たちの起源, 新曜社, 225
- 22 前掲書21, 163-164
- 23 前掲書20, 117-122
- 24 加藤繁美（1993）保育者と子どものいい関係—保育実践の教育学—, ひとなる書房, 86-89
- 25 西垣吉之・山田陽子・寺見陽子・西垣直子（2004）子どもの心が複雑化・立体化していくことに関する一考察—心地よさを形成するという観点から—, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 23-31
- 26 森野美央（2012）乳幼児期における情動調整研究の動向と展望. 比治山大学現代文化学部紀要, 19, 107-116
- 27 鯨岡峻（1990）コミュニケーションの成立過程における大人の役割—乳児・母親および障害児・関与者のあいだにみられる原初的コミュニケーション関係の構造—. 島根大学教育学部紀要（人文・社会学科）, 24（1）, 47-60
- 28 根ヶ山光一（2002）発達行動学の視座：＜個＞の自立発達の人間科学的探究, 金子書房
- 29 西條剛央（2002）母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究：ダイナミックシステムズアプローチの適用. 発達心理学研究, 13（2）, 97-108
- 30 西條剛央（2004）母子間の「離抱」に関する横断的研究：母子関係を捉える新概念の提唱とその探索的検討. 発達心理学研究, 15（3）, 281-291
- 31 高濱裕子・渡辺利子（2006）母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ—1歳から3歳までの横断研究—. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 1-7
- 32 星三和子・塩崎美穂・勝間田万喜・大川理香（2009）保育士はゼロ歳児の＜泣き＞をどうみているか—インタビュー調査から乳児保育理論の検討へ—.
- 33 上田七生（2002）乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程—第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に—, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 51, 359-363
- 34 村上八千世・根ヶ山光一（2007）乳幼児のオムツ交換場面における子どもと保育者の対立と調整—家庭と保育所の比較—.

保育学研究, 第45巻, 第2号, 19-26

- 35 やまだようこ (2010) やまだようこ著作集第1巻ことばの前のことば うたうコミュニケーション, 新曜社, 164-165
- 36 江口純子 (1976) 保育園の1歳児の相互交渉について, 北海道教育大学紀要教育科学編, 27 (1), 23-33
- 37 無藤隆 (1996) 共同するからだとことば: 幼児の相互交渉の質的分析, 金子書房, 1-14
- 37 大桑萌 (2014) 0～2歳児の仲間関係における模倣の役割, 保育学研究, 52 (2), 28-38